



此乃箱情抄年十六之六



九曜文庫



花鳥餘情茅廿九

浮舟 ウキフネ 蛭蛉 ヒルシ

浮舟 ウキフネ

卷の石の秋をさへくはる大ゆり二十三

歳九喜の事な利

宮な成るのめりたりしゆを

白言ニホク此二条院の對タイりしきゆぬる君

をんつと行つるゆを

かの人をゆりしゆのさふちりしとて

是よりいなるゆらちしゆの事く

又まの御しるあかきしむる



是に二条中君の御成りなり

言の端いよむかひたれども

是も二条に言ひし事のつらき事なり

後かゝる事

けいあまのむかひなり

河海之と文の事なり今葉をいふ

いかにしつゝもあまのむかひの御成りなり

なるとわらふそはじり也嫁娶志後朝

の馳書なるといふつゝ文ありふりいふ

やうも舊記にみえりこのむかひ

又いふしきたる御成りなり

なるとわらふそはじり也嫁娶志後朝

はる文二海にありありなり

ふりこゝねといふなり

合めといふははるに

色つゝのむかひ

もいふなり花つゝのむかひ

つゝのむかひ

木の枝よらむらむらと花つゝの卯杵

なるとわらふそはじり也

まゝゆりぬ物よあは君たなうきんよまのしとちを舞
ゆこるりぬいさうこふまぬな利ニタフリー 杖極よそん
そりまのしとちうらんま松一とんふん也
おさる火人うらつとんと

わらひは事一し

御まうらにしをそれい給大あつきのなる人の
ゆまのサラゴ作文あつ事也大内ナリーキ記ヒテブノ或終の
博ヤマ通ミチ定サダと名のつとふう一と下イ
んこあつ

このこらゆまうそつうさうぬいあつん

このこらうに二條の君とうさうぬをあや

ーと思たふあつ

大将まあといふあつぬあつ

ふにちのきとゆい詞なつ

あゆまきまそらうとあつせつわてあつん
のこあつ

ふあつれあつら成字ゆつあつとん

中の志よあつあつ事也

右近ウキ地あつとん

あつぬ事とん

かゝるさうせ新ひかここみりもる海川ちさ
せなまらうと

京の母の人の家へつらぬまといあはるは
ふりぬもつらぬまといあはるは

御物まるとつらぬ

うさ母の君石山まて治りんとる事也

このおののつらぬ物へけひ

おの母の魚のつらぬまといあはるの君へ

母との娘まといあはるつらぬまといあはる

つらぬ

右をなまここのまといあはるまといあはる

まといあはる君のつらぬまといあはる

京のつらぬまといあはるつらぬまといあはる

二条院まといあはるのつらぬまといあはる

人とのつらぬ

あはるつらぬまといあはるつらぬ

六君のつらぬまといあはるつらぬ

御まといあはるつらぬまといあはるつらぬ

このおのつらぬまといあはるつらぬ

あはるつらぬまといあはるつらぬ

志らくい候物結りもわね初也申れ者と
いひの親類しんるいなれとやういひのいひと
らんとあつたの思ひよ

御車ごくるま目下めげ申すあつたといひ

母上のいひのいひ入る車とて

あつたといひし事

大なる車おほなるくるま仲なつ候まうわりの家け命いのちありみ

らとていひし事

とていひし事

何なに事ことの家け司しあり物もの事こと権けんありといひ

右をいひてこのとていひし事
らとていひし事

をいひし事をいひしこと

女むすめの事こといひし事

是こゝろの事こといひし事

時のいひし事
を

是こゝろの事こといひし事

あつたといひし事

いひし事

我一人をききしるよはりのとふた世の大
史といひて右進のちる人なり

と後なる衆その人ともんまじりて行く

あそりの一り見處の人とふまやうに

あそりの人をあんと云ふ

又いふもやふれぬひりぬもあた

我形乃るもよとて人のるよにふ

あつたあまのよにふれぬもあ

まじりて

かつかつていふまののあつたあ

中居のちるちねのあつたあ

かつかつたあつたあつたあ

うといふあつたあ

とていふあつたあつたあ

らあ

石衛門まの^{あつたあ}後志して帰て文を右進のあ

つらつたあつたあつたあ

いふ

我とていふあつたあつたあ

らあ

とほつておちつり侍

ニホシキ 目下紀元大山守皇子随亮道河而没釈云

ヤチチウケガミ らるる今らのつらにまよふにまよふ人へいひまを

みさし川のみまのつらにまよふにまよふ

急ゆへにまよふにまよふ人へいひまを

と女君の心へいひまを

人へいひまをいひまをいひまを

是より母君の心へ

あつらひ日まをいひまをいひまを

いひまを

あつらひ雨の心へ

この御といふ人の女君もいひまをいひまを
あつらひ雨の心へいひまをいひまを
いひまをいひまを

少輔いひまをいひまをいひまを

いとまをいひまをいひまを

人を称いひまを

あつらひ雨の心へいひまをいひまを
あつらひ雨の心へいひまをいひまを

イツモノゴロカミトキカタ 伊雲権守時方なり

じうい家らうとふ人のありき後乃河連とれ
きよ思らうひてぬりそ力成なる心た然
とありき後

万葉卷第十六日昔者有娘子字日根見也
于時有二壯士共誅此娘而指生格競覓死
相敵於是娘子歔歔曰從古來于今未聞未
見一女之身性通二門矣方今壯士竟有難
和平不如妾死相害永息余乃尋入林中懸
樹經死其兩壯士不敢哀勸血泣連襟各陳
心緒作奇二首

吾心何如しむじ我思極乃承らりにけり
或曰昔有三男同聘一女之娘子嘆息曰女
之身易滅如露三雄之志難平如石遂乃
彷徨池上耳を沈没水底於時其壯士亦
不勝哀顔之至各陳所心作奇三首
娘子字日根見
有三歌略之

わらうりそたき御まにけい
多きた為極とつふ事
ふらふら

さしきしきし用ゆる筈

東よりき御文あゆなりと云

こよと云御伊勢物語いあやふ

よ

はらへにひいぬまを

不用こよひ御返りもるあまは

さしきしきし用ゆる

はらへにひいぬまを

よ

はらへにひいぬまを

さしきしきし用ゆる

源氏一やあなをうとく物と志とてわが

大和物語草中一あやとて

さしきしきし用ゆる

うちお山のうがま

と云ひぬのうがま

あり今葉あやうじ

まといは物語の枕校い

まといは物語の枕校い

結のう結もつきの大将のま

青^{カキ} 宇治ハ

馬名ハ廻リ之御もかへりうわ家サ三
威の去り枯きくの事ハ何

手^ヒハ今おそぬとゆへにひとひな
うきぬのちの来ハ^{ヒメギミ}姫君ヲ我カ^ヒと^ヒし
じと思ひつる事ハ^ヒい^ヒう^ヒを^ヒか
を^ヒあ^ヒ新^ヒつる^ヒゆ^ヒい^ヒま^ヒの^ヒま^ヒぬ^ヒま^ヒれ
さ^ヒう^ヒと^ヒり^ヒ及^ヒず^ヒう^ヒ乃^ヒ人^ヒ志^ヒあ^ヒと^ヒあ^ヒは^ヒい
う^ヒと^ヒう^ヒそ^ヒと^ヒゆ^ヒか^ヒい^ヒま^ヒい^ヒる^ヒ物^ヒ結^ヒの^ヒつ^ヒ
い^ヒと^ヒぬ^ヒあ^ヒり^ヒし^ヒか^ヒい^ヒゆ^ヒい^ヒと^ヒあ^ヒな^ヒや

物^ヒさ^ヒりの^ヒ姫^ヒ君^ヒ乃^ヒ今^ヒハ^ヒぬ^ヒし^ヒま^ヒや^ヒれ^ヒぬ^ヒん^ヒあ^ヒ
の^ヒち^ヒあ^ヒい^ヒ

信^ヒ者^ヒ乃^ヒ物^ヒさ^ヒりに^ヒ姫^ヒ君^ヒの^ヒ母^ヒハ^ヒゆ^ヒん^ヒの^ヒと^ヒあ^ヒ
い^ヒと^ヒゆ^ヒい^ヒと^ヒあ^ヒり^ヒけ^ヒり^ヒと^ヒい^ヒと^ヒゆ^ヒせ^ヒり^ヒき^ヒけ^ヒり^ヒ事^ヒ

よ^ヒい^ヒふ^ヒも^ヒや

糸^ヒり^ヒあ^ヒり^ヒし^ヒは^ヒい^ヒの^ヒん^ヒと^ヒ

母^ヒ君^ヒ乃^ヒ使^ヒへ^ヒり^ヒ乃^ヒ巻^ヒり^ヒみ^ヒえ^ヒり^ヒ

お^ヒい^ヒゆ^ヒつ^ヒこ^ヒな^ヒて

思^ヒゆ^ヒ也^ヒ 丑^ヒ吉^ヒ通^ヒこ

よ^ヒゆ^ヒり^ヒゆ^ヒり^ヒと^ヒあ^ヒり^ヒみ^ヒと^ヒ在^ヒ近^ヒと^ヒい^ヒと^ヒい^ヒ

母君のこころを事云

のらふまゝにありん事と申すは母の愛にあらむこと

クニヒ

巻較よまづきしう奇

持の言はあつてもいふ福とて我の心もあつても

たうと海にせんしんせいの事

いふまゝに思ふ事と申すは母の愛にあらむこと

作意方

つとよほは母の心と申すは母の愛にあらむこと

いふまゝに思ふ事と申すは母の愛にあらむこと

あつても

うのよゆ俄にせまつことしはのこ

くさつとくえつとつとてまつことやあり

一に俄に死行なつとせりる事

うとつものつなむとてまつことやあり

も来りたり眼のまぶさつとつとけあわ

つとつものつなむとてまつことやあり

母の心と申すは母の愛にあらむこと

白文ありておまゝのつなむとてまつこと

作意方ありておまゝのつなむとてまつこと

上りありておまゝ

今のみく行じ命帝^{タイシヤク}救も返し治めく

梵^{ボツ}天帝^{タイ}救^{キウ}人^{ジン}多^タとほりごとく天^{テン}也^ヤ帝^{テイ}救^{キウ}

切^{セツ}利^リ天^{テン}のま也^{マヤ}或^{アル}抄^{セウ}は宇^ウ治^ジ大^{ダイ}御^ミ高^{カウ}結^{ケツ}津^ツ

鏡^{カウ}き可^カ又^{マタ}吾^ガ相^{サウ}ら^ラのう^ウ治^ジとい^イひりい^イし

ある事^{コト}れあ^アるとむ^ムり又^{マタ}海^{カイ}の^ノ東^{トウ}玉^{ギョク}

属^ク原^{ゲン}たりは^ハ拒^{キョ}絶^{ツツ}辞^ジをつ^ツら^ラ事^{コト}と^ト心

ありし^シ事^{コト}と^トうの^ノこ^コろ^ロか^カら^ラい^イり

帝^{テイ}天^{テン}の^ノ今^{イマ}死^シき^キと^ト也^ヤと^トう^ウが^ガ治^チあり^リす

と^トい^イひ^ヒて^テい^イふ^フも^モう^ウも^モう^ウと^トい^イふ^フ

人^{ヒト}の^ノこ^コろ^ロも^モあ^アら^ラし

今^{イマ}の^ノこ^コろ^ロあ^アら^ラし^シも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

りの^リこ^コろ^ロあ^アら^ラし^シも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

知^チえ^エぬ^ヌ事^{コト}と^トい^イふ^フも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

時^{トキ}方^{カタ}の^ノ思^シひ^ヒも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

ら^ラん^ンと^トい^イふ^フも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

ぬ^ヌも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

あ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

を^オい^イふ^フも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

じ^ジも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

い^イふ^フも^モあ^アら^ラし^シと^トい^イふ^フは^ハい^イふ^フは^ハい^イふ^フ

二条殿より白紙の御返書

世に秘蔵の書とあるは、いふに、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

とあるは、*Shinshu* の書に、*Shinshu* の書とあるは、*Shinshu* の書

人形の水戸の物

八代実録の事とせらば行なはる

ふまゝに世に傳へし御抄も海成と云ふ

まゝに海に傳へしに御抄も海成と云ふ

御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

抄しきれえりしと

御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

里うちりしに御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

是し里うちりしに御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

よまゝに御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

班屏帯四位五位の令きよ用之為御志

鳥屏帯諒闇の班屏と云ふ

六十僧のうちを御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

三代実録に貞観十一年七月五日辛未延

六十僧於紫宸殿以三日猶續大般若經

けお六十僧と云ふと御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

猶續の事と云ふ又御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

御抄も海に傳へしに御抄も海成と云ふ

七僧の事とせらば行なはる

七僧の主人ソウジキの僧食の事ソウジキウエ七僧は舎シヤの十
九日ユウジツより終ハヤシの海師カウシ 護師ゴシ 呪願ジュガン 之礼シ
貝ガイ散サン花ケ堂タウ達タウ 是と七僧とシチソウとト

ふらの人御公ミコノミのさらさらと

白言ハクゴンとつらつらおのころあつらふまにゆひも

しとこしとれぬあまき

あいつは御師ミシのさらさらと

是コノ白言ハクゴンをカキて

きんぎのミ御師ミシのさらさらと

明石中アカシナカあまの御師ミシのさらさらとキヤウフク 授服ジュフクはぬのり

二のまゐるん御師ミシのさらさらと

白言ハクゴンのミ御師ミシのさらさらと

小宰相サイライの君キミとよ人のさらさらと

あつた志シのひまがひまよ宰相サイライおるも一品ヒツピン

のまのさらさらと

いづれとつらつらと

白言ハクゴンも世人セカイジンとたあつたつと

とつらつらとつらつらと

あつたつらつらと

あつたつらつらと

うねり行魚

氷と小宰相コサイサイの君ミコの御

おのまじい事コトはくちまゝありて

ふい

さう事コトはいさゝかして清シヨウを

引ヒキきよめて居イる

いふと海ウミもさしおろして

あつアツの末スエはくちまゝ

もさしおろされサレて

つぎ行イく

はとちと

是コトはあつ

大戴オホダイよ

一ヒト品のモノは

さう

傍側ナドワタリの

乃ナま

あつ

と

御ミコの

へんしんしよのまじりしんせき

御くろくがまじりなまじり

御くろくがまじりなまじり

かりてまじりなまじり

たまたま小宰のまじりしんせき

おひしりてまじりなまじり

れんせきまじりなまじり

白文のまじり

下子チヨシまじりなまじりしんせき

白文のまじり

下子チヨシまじりなまじりしんせき

まじりなまじりしんせき

まじりなまじりしんせき

まじりなまじりしんせき

まじりなまじりしんせき

白文のまじり

お席マシてまじりなまじりしんせき

まじり

一島文のまじりしんせき

まじりなまじりしんせき

らりいも給ふ也

ちの心いせもよみの

廿二文の御事上の親より文の御事上
らるる人ありてやあつらん

わの物母もつせも給らん

繪もよき

一歩の言よはつと思ひそむるもの
ちの終るなれ

いと世のらうの今もあつ

小宰相の君なり

をいふ君られとよみ給ふ給

夕なうらぬ人のきんあらなり

いち君いあつにさゆらわ

一歩乃ま申富の御事上

あかんわなれこの君いふ給らん

中まらるるおと兄弟の事

人よりんせ行てつものまにあらうらた
一歩をいふかたあつらん

白文の御事上

宰相サイシヤウの君のあかんとくふん公行らる

まをうしせ行て

この歌に中 *his koto*

言ふ事二集 *his koto* 言ふ事

言ふ事の中 *his koto* 言ふ事

の君れ事一

his koto 言ふ事

言ふ事の中 *his koto* 言ふ事

言ふ事の中 *his koto*

中 *his koto*

言ふ事の中 *his koto*

中 *his koto* 言ふ事

言ふ事の中 *his koto*

言ふ事の中 *his koto*

言ふ事の中 *his koto*

言ふ事の中 *his koto*

言ふ事の中 *his koto*

言ふ事の中 *his koto*

言ふ事の中 *his koto*

言ふ事の中 *his koto*

侍候し申上り申すまじりなりんとも申さず

このまじり申すは或る所のまじり申すは

まじり申すは或る所のまじり申すは

昔よりまじりのまじり申すは

まじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

まのまじり申すは

物いさよもい申しつらき事

まろくもあまのいふなりけり

もなまのいふ事

かゝりあまのいふ事うらやまのいふ事

おまのいふ事あまのいふ事

わんがにいふ事いふ事

女^め師^しのいふ事あまのいふ事

女^め房^{ぼう}のいふ事あまのいふ事

あまのいふ事

あまのいふ事あまのいふ事

うらやまのいふ事あまのいふ事

めく思ひあまのいふ事

あまのいふ事あまのいふ事

年の^{とし}許^{もと}の^{もと}也^{なり}

あまのいふ事あまのいふ事

あまのいふ事

あまのいふ事あまのいふ事

あまのいふ事あまのいふ事

あまのいふ事あまのいふ事

あまのいふ事あまのいふ事

御事と申すは御事と申すは

かの御事の中將の君ときよ

一品ちしの女房なまご

〜〜〜〜〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

思召おもひ

〜〜〜一品の女なまごは〜

論語曰コトコト難乎有桓美カキコト述而コトカセ

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

〜〜〜一品の女なまごは〜

少くもこの世に生かすは

是を遊地^{ユラヒ}窟^{クラツ}の刻入^{キツ}一おまへ廿二文の由^ユ

の事^{コト}をすまのひ^ヒに^ニか^カいて^テか^カる^ル

み^ミね^ネの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

ま^マね^ネを^ヲあ^アり^リん^ンの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

是を^{コト}極^{キョク}地^チ窟^{クツ}の^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

明^{アカシ}る^ルの中^ノ一^{ヒト}文^ノの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

母^{ハハ}の^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

我^ワの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

入^イ道^{ダウ}文^ノの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

い^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

ま^マね^ネを^ヲあ^アり^リん^ンの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

廿^ニ二^ニ文^ノの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

有^アる^ルの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

あ^アの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

あ^アの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

中^{ナカ}の^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

故^{コト}文^ノの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

い^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

い^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハの^ノい^イは^ハ

と君の御心

たきくしのこころをいふ

わうりまはしくあまのこころをいふ

こころをいふ

ふたふたまたまのこころをいふ

と

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

こころをいふ

こころをいふ

とくろくはふのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

あふくしのこころをいふ

色は紅虫の如くかなるなりや

花鳥餘情茅三十一

辛習 夢浮橋

テナラヒ
辛習 宇治九

詞とりと巻るるを新わつ大将の女三蔵
のまより女ははまきまの事みまらうり
乃年らき強きの馬よ同様の事なる
うのはよ川りなふしうきけいとうひくつそ
うとていんまらるやまらあまりのもく五十一
つりのもつとありのし

是らわらちねの女三蔵つりの事みま
うはらうた大さ其時氏とらて子木

横川よりふし僧部ソウブツと息心院エシシンインの源信僧部ゲンシンソウブツ
 の思ふよりてよりこの僧部ソウブツを慈恵僧部ジエソウブツ
 の丹ニみよりく横川ヨコガハよむと給て顯密ケンミツ乃教ノウキョウ
 ひろちたりお千餘イセトの妹イモトとよも東養アキヤウれ
 后ゴとつひ一人ヒトなまゝなり世榮セエイといひ性
 生セイと一人ヒト此物コノモノ諸モト一人ヒト小野コノノの后ゴとつひて
 子コの親オヤの老オシと御ミ一人ヒト一人ヒト
 抑ヨサりき郎ロウありて御ミ一人ヒト一人ヒトて常利ジョウリ
 僧部ソウブツの母ハハ君キミのミコをミまゝとてさう也ヤ毒ドクの僧ソウ
 部ブツといふの母ハハはミつゝの親オヤ世音セオンよ祈イノ禮レイ
 てまゝけりる今イマありき心ココロよよりてありき
 然シカドモありて御ミ一人ヒト一人ヒトとつひて
 みまひり一人ヒト一人ヒトとつひて
 金峯山キヌダケヤマ精進セイジンのミコ後ノチ東アキ前マエ礼レイ洋ヤウ令レイ
 岩イワ山ヤマ百ヒャク座ザとて
 あり祈イノりてれいしとありて
 后ゴのミと小野コノノ一人ヒト一人ヒトとつひて
 故コ朱シュ蓮レン院イン西セイ形ケイとて

宇治とつひ一人ヒト一人ヒトとつひて
 日ヒ太タイ上ジョウ皇クワン 陽ヤウ成テイ 御ミ宇治院ウジイン 拖ト彌ミ山ヤマ野ノ又マタ天テン宗ソウ又マタ八ハチ
 天曆九年十月六日
 天曆九年十月六日

妹はわりのわりのじとりのうりにみんと思ふ
ひらきよきたるまのりて

これに廿二夜の事とて

むえりしにいとるり

大ニ桑園日女親子屋よありと大原ヲハラ

とみわりしと時の人小姫皇座と号とカウ

大原と小野のうらなれ

あつたけ事よ出りしうり

あつたけの昔佛と僧侶とてしつあり山と

このうらひありとも事人おけりんをわら

坂とてまうくいあにうらうら来うとて

くとのじらひおしとて心わらうらもむおけり

法華經ホフケキョウ隨喜ズイキ功德品トクデヒン云

面目オモテ悉シツ端嚴タンエン為人タヒト所トコロ新見シンケン云

おふらう禮えびよとてとてみらおきり

しちちのうらとていれとのけい

法華經ホフケキョウ之佛種ノブツシユ從緣起ユヅルキ

今葉一切也相諸法乃持イマエイツクテサウショウホウノチと弟八阿頼

耶藏トヤザウ合カヒ系ケイと深洋シニヤウの海ノミよとていれ

現行ゲンギョウして佛とて二所生とてなうた

草木の根の地底の縁とより
サラモク タヨ トヂ ウロ ヒ
 生長をゆるぎ種われと縁なきれ
モラチヤラ ゲキヤラ タヨ ヒ
 現世を并の慈悲よりゆるぎ
ゲキヤラ ヒ ヒ
 之ろの人心宿同の業建は是とらけり
ヒ ヒ
 縁となりゆるぎと泊漸の親善小節の
ヒ ヒ
 互公にゆるぎかろうと同行よりては
ヒ ヒ
 其の意をみらひゆるぎ増と縁と如く
ヒ ヒ
 くれじうんのはゆり
ヒ ヒ
 唯識論曰 云何無慚不顧 自法輕拒賢善
ヒ ヒ ヒ ヒ
 為性能障礙慙 生長惡行為業
ヒ ヒ ヒ ヒ

女はしらほけとゆるぎ
ヒ ヒ

法花淨安樂行亦云又菩薩廣訶薩不
ヒ ヒ ヒ ヒ
 於女人身取能生欲相而為說法者
ヒ ヒ ヒ ヒ
 為女人說法不露齒笑不現胸臆乃至為
ヒ ヒ ヒ ヒ
 法猶不親近况復餘事
ヒ ヒ ヒ ヒ

ようぬの地といはゆるぎ
ヒ ヒ

是ハ大徳あらのこと
ヒ ヒ

よき女のあはれとみゆるぎ
ヒ ヒ

宇治のうらゆるぎとみゆるぎ
ヒ ヒ
 てしあはれとゆるぎ大君のゆるぎ
ヒ ヒ

はらうとてはらうとてはらう

うき舟の君とてはらう

はらうとてはらうとてはらう

うき舟とてはらうとてはらうとてはらう

おき舟とてはらうとてはらうとてはらう

はらうとてはらうとてはらう

うき舟のうき舟とてはらうとてはらう

事と思はれはらう

はらうとてはらうとてはらう

おき舟を身とてはらうとてはらう

うらうとてはらうとてはらう

うき舟とてはらうとてはらう

はらうとてはらうとてはらう

業平申おはらうとてはらうとてはらう

うき舟の初とてはらうとてはらう

おき舟とてはらうとてはらうとてはらう

おき舟とてはらうとてはらう

はらうとてはらうとてはらう

おき舟とてはらうとてはらう

はらうとてはらうとてはらう

らうら

この朝よきまに人のあはれむとて
らんやうふいぢはらちかきつとて
いひかきぬなり

六のあはれとあてたりんちりて

僧部ソウブの母君とて

じとちろあま君いんちりてわうとて

小野コノ屋のちきと徳の夜とよよとて
又あまのちのちよよとて

七のあはれとあてたりんちりて

うら川とあてたりんちりて小野

妻メトのちとていんちりて

あつちりて

常陸ヒコチノクニ國の事なり

夕ツキのちとていんちりて

夕霧ツキのちとていんちりて

うら川とあてたりんちりて

うら川とあてたりんちりて

うら川

うら川とあてたりんちりて

よふふあり

わうく物どののあやうそそたはゆめん

是より、^{ついで}后君つうきよは君のうらうらと

伴と遊らうそをうそまきいゆらうもゆめ福と

是こころ舟の君のありあへ

らなかりおの物かひきむかひぬい

あかりひきまきまにむらうらうら

うらけお心あはれ

うらけは舞の世のい

まららの物とあんなにゆめあはれ

小町ナニヤメのうらうらにむらうらよナニヤメ女帝花のうらあは

下の詞よむとらうらうらと中ねのまらう

うきうきうきうきうきうきうきうき

くナニヤメい

わらうけあはれ福ひにうらうらうらうら

后ナニヤメ云の也事なれ

うらうらうらうらうらうら

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

申将の御書

ゆりくさんからうりくゆりたあ

い第の祿^ゴりうきいもくそれと和歌

たふれりうりて唱^{シラシラ}方おにああ 後拾遺

第の祿^ゴりうきいもくそれと和歌

うりくさんからうりくゆりたあ

中将の文おは

おさのまよ^ゴりうりて唱^{シラシラ}方おにああ

後拾遺 花のまよ^ゴりうりて唱^{シラシラ}方おにああ

今葉是よりい浮舟君のうりく

ゆりくさんからうりくゆりたあ

うりくさんからうりくゆりたあ

うりくさんからうりくゆりたあ

ゆりくさんからうりくゆりたあ

今葉

二とこの板のうりくゆりたあ

思おはまよ^ゴりうりて唱^{シラシラ}方おにああ

あは君まよ^ゴりうりて唱^{シラシラ}方おにああ

花のまよ^ゴりうりて唱^{シラシラ}方おにああ

花のまよ^ゴりうりて唱^{シラシラ}方おにああ

のじとちり事あり

いんげんをまきたるものなり

姫君おのり尼と基とら行りひかま

いせんをせりりー海けりーいんげん

をーいんげ

いせのんをりて

備前椽橋良利肥前国友津郡大村

人やお家若寛蓮亭子法皇山やまのり

仰まき心りー大和物造よのをり

泰のともふりいりて基聖ととり

延和十三年五月三日基聖奉勅作基式部

之云と抱朴子曰園基者世謂之基聖

故嚴子卿馬縵明有基聖之名也

或書云唐堯造基教其子丹朱

一説曰不然基出於戰國之時云

けし僧部めんやんけし

とと僧部とん公とらけし僧部ぬり

まけけし事とら

まけけし事とら

華のまよと物部の夜と事とら

ひらりひらり花の影をうきまうた家なれ

中

女君一とありいさまり終つらうし使う人ぞ

そらふ也

おひ人の御ささより終ひりし事村

大屋云うさへいひされぬ也

毎まうきこし終ひ人のうらみし事村

いして

是いおま君乃まうさふ人のいさうと

いさまあうりしと白鳥よまうと終ひ

みらあく宇治院とてまう祿あひ行つと

中一将よこしは

むらうあわうりてうらさうりきじ

仕事^{コト}縁^エ留^ルと勤^{サカシ}好^{コト}と終ひあへ

いさまあうりしと

上よみえうり姫君のなよわう^{コト}童^{コト}のな

まあうりしとれうりもあそりしとあつと

中一

冥^{マイ}途^ト布^フて鬼^キあ^アせう^{セウ}れ^レん^ンす^ス

小物の色とたりしとちうり終ひ

年毎にうらん物、扱合白まぢも、おぼろに、おぼろに、
ちり、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、
人々

是のうら、大なる事

鳥のたぐい、まじり、まじり、まじり、まじり、
あつらん

行基 山鳥のうら、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、
と、葉秋のあ、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

も、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、
園頭二回、五カテラと、法師と、おぼろに、

おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

オニアイ 忠おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

くら、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、
龍リウニョ、ミヤク、ブツ女成佛の事

この御、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

サイ、ヒヤク 宰相と、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、おぼろに、

よきあはれいせいのあはれい

かたはらやうなる人なる

かみとみまのあはれいといふはうやう

いせいのあはれいといふはうやう

いせいのあはれいといふはうやう

このあはれいといふはうやう

申ねうちよといふはうやう

いせいのあはれいといふはうやう

いせいのあはれいといふはうやう

いせいのあはれい

常陸ヒタチのあはれいといふはうやう

いせいのあはれい

あはれいといふはうやう

いせいのあはれいといふはうやう

あはれいといふはうやう

あはれいといふはうやう

右のあはれいといふはうやう

あはれいといふはうやう

あはれいといふはうやう

いせいのあはれい

いふはくむ福せ行へし

来ぬひんのもよひなる事也

じいの命もいふはくむ

后君のまじとる事とふおゆる也

みーれとていむり物一始ひ来

浮舟君の母はるし

ちおこのしむせをゆる

うき舟君の一周忌のまひよとたな

まーし

かのむらのおもむく

元服一ふとく

こころさくしや

さく思也

入まらぬおきまうあつや

此人といふまじりあ思給一人なるを

言りいふ一はくちぬよこりあにぬ

ふそちつあし中あいらりて

あつしつあし中あいらりて

あつしつあし中あいらりて

あつしつあし中あいらりて

おれ徳抄シヨマウよひさうきれいさうりあさぬ珠
たけなよきまじりきん人のたひいさふま
そとく人の死さをしきり入ま棺して
火屋かきしきまじりしきりあてま
ありさうまのあつちもろれとつよふ
てきとぬみまきこ

らんくこめまやうれ物
天物ガとつふ星おしのふくや物チウしきらわらふ
天魔の頼とつう
まのつらしてあさうしきれい

け美のみくれしきりあ

舌タの折キむら

は海よこの義とせりりらのであさ
し舌の折さた舌しあ家イキの折
かうんしきりのふくまう人の折さ
ましりみゆらしきんたひゆら
ーわ

かきらるるしきんのもも

さかい舟の舟まうて思ふあ

かきらるるしきんのもも

とく唯この神の心と海との心と
をいかにあはれらうとすべし

衆をいかにあはれらうとすべし
とく唯この神の心と海との心と

とく唯この神の心と海との心と

衆をいかにあはれらうとすべし

とく唯この神の心と海との心と

衆をいかにあはれらうとすべし

とく唯この神の心と海との心と

衆をいかにあはれらうとすべし

とく唯この神の心と海との心と

とく唯この神の心と海との心と

衆をいかにあはれらうとすべし

とく唯この神の心と海との心と

とく唯この神の心と海との心と

衆をいかにあはれらうとすべし

とく唯この神の心と海との心と

衆をいかにあはれらうとすべし

とく唯この神の心と海との心と

とく唯この神の心と海との心と

心ありひよりひ終るは海よ藤玉と云り
たわぶね

重應仁く乱初遊上都皆寓九條之坊因敦
之秋重赴南京僊卜十弓之地尔来已歷
且秋虫空感双蓬髮潦倒之餘功夫之暇忘
白樂天世俗文字之玩紫式部源氏物語
之詞篇々通教令命脉夕々貫和弄一之
骨髓於是每觀覽知日新月感及尋擇
悟今是昨非遂挹河海之流盡真源出以
底被覆花鳥之使馮餘情お毫端也

文明四季龍柔壬辰徐月上澣

枕夢居士七十一歳誌

卷之六

...

...

...

...

...

...





